『台湾研究序説』の構想：
代わり変わる帝国と「台湾という来歴」

若林正丈

（邱若龍畫）

早稲田大学台湾研究所

2023年２月２５日

講演の構成

一．「台湾という来歴」のコンテキストを求めて：『台湾研究序説』の構想

二．第Ⅰ層の視座＝台湾歴史時空の磁場：諸帝国の周縁と”方法的「帝国」主義”

三．第Ⅱ層の視座＝台湾歴史時空の行動者：原住民、外挿国家、漢人移民

四．第Ⅲ層の視座＝台湾歴史時空における周縁ダイナミズムの展開：
【例示】諸帝国の「網」と「鑿」とが繰り出す国家・社会関係のコンテキスト

五．結びに代えて

一．「台湾という来歴」のコンテキストを求めて：『台湾研究序説』の構想

1．動機：なぜ「台湾という来歴」か？

⑴地域研究論としての基本的問い：「台湾とは何か」へのアプローチ

①国際関係**論**的手法　②国際関係**史**的手法

花蓮県某郷公営墓園（若林撮影、2009年3月）

⑵直感的動機：「諸帝国の周縁を生き抜く」

☆台湾原住民の墓銘碑；一人の台湾青年、三種の軍服

⑶研究来歴上の動機――――研究関心の同心円的拡大

①後期抗日運動史研究：「台湾は日本と支那の二つに火の間に立つ」（矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』）　*@若林,1983；2001*

②戦後政治（史）研究：米中「七二年体制」＋「中華民国台湾化」論→「台湾をその周縁に位置づけてきた諸帝国を遠望する歴史的視座」*@若林,2008*

一．「台湾という来歴」のコンテキストを求めて：『台湾研究序説』の構想

1-⑵直感的動機：「諸帝国の周縁を生き抜く」：

☆台湾原住民の墓銘碑：四種の文字（漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字）・四種の名前（民族名、漢人名、日本名、キリスト教洗礼名）

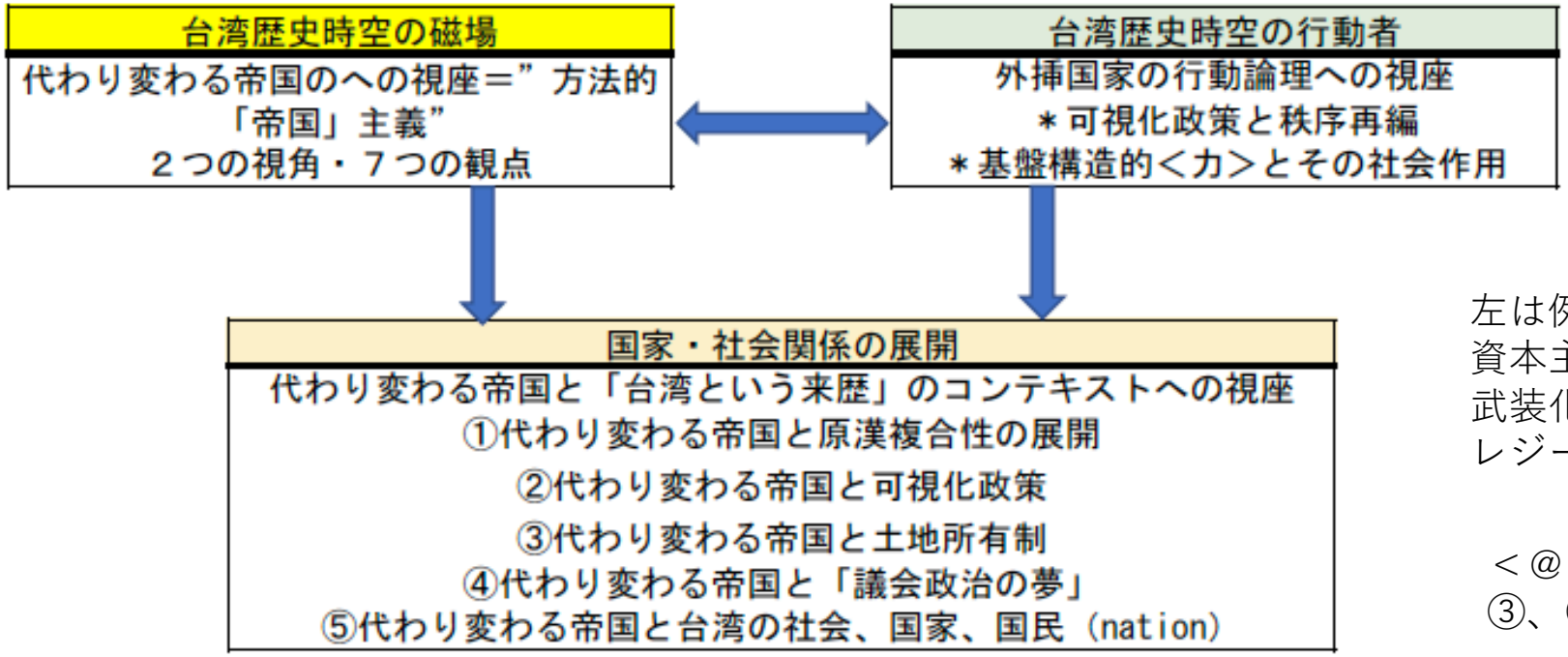
高雄市旗津「戦争と平和記念公園テーマ館」のレリーフ：一人で三軍の軍服を着た青年が台湾海峡を見つめる

日本軍、中国人民解放軍、中華民国国軍

台湾人元日本兵・元中華民国国軍兵士の慰霊と名誉回復運動を続けた故許昭榮氏（1928-2008.5.20）

一．　「台湾という来歴」のコンテキストを求めて：『台湾研究序説』の構想

２．『台湾研究序説』の構想：三層の視座
＠図１：磁場、行動者、コンテキスト



出所）若林正丈作製

左は例示：この他に、資本主義化、社会の非武装化、ジェンダー・レジームの展開、など

＜＠時間の関係で、②、③、⑤は省略＞

二（第Ｉ層）-1-(1)　「諸帝国の周縁」という歴史磁場：
周婉窈の概念図「地理空間で歴史の空間を定義する」から考える

☆台湾史の「歴史時空」＝四角形PQQ’P’（点は若林が付加）

☆台湾史のアクター：

＊A～E：先住民族

＊F: 中国大陸からの漢人

＊四角形１～５：「時代」実は国家、それらは諸帝国の台湾への「外挿国家」

１：「オランダ東インド会社時代」

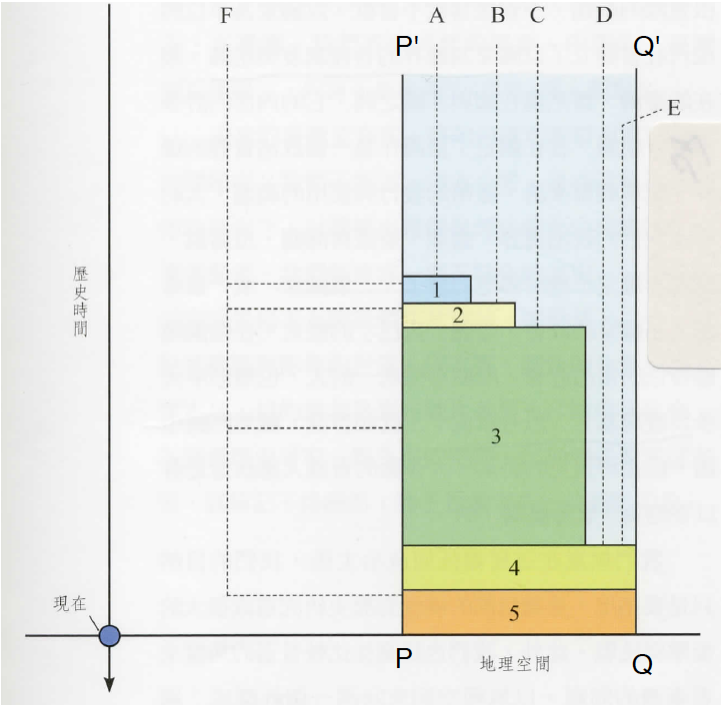
２：「明鄭時代」

３：「清朝統治時代」

４：「日本統治時代」

５：「国民党政府時代」

→台湾歴史時空の行動主体：原住民族、移住漢人、（諸帝国の）外挿国家



概念図「地理空間で歴史の空間を定義する」

出所）周婉窈『図説　台湾歴史』（第三版、2016年：7頁）

二-1- ⑵台湾史は世界史である:”方法的「帝国」主義”

☆台湾は諸帝国の一部分として編入される→統治機構（国家）が外挿される→諸帝国は台湾史の内部に入り込む→台湾史は世界史である

＊主要な諸帝国の台湾外挿国家：

・清帝国の州県制官治機構；

・大日本帝国の台湾総督府＝近代植民地国家；

・アメリカ非公式帝国庇護下の「台湾大」の中華民国（挫折した中華国民帝国）

☆二つの視角：

＊「帝国の網」（台湾への国家外挿の国際関係史）

＊「帝国の鑿」（諸帝国の外挿国家と社会(複数)の相互作用の歴史社会学）

→”方法的「帝国」主義”

二−２．「帝国の網」：台湾への国家外挿の国際関係史【３つの観点】：東アジアにおける諸帝国の興亡と台湾島の地政学

⑴「地理はモノを云う」＝台湾島の（地理的位置の）地政学重要性の顕在化の局面

＊17世紀、19世紀後半、20世紀中葉、2010年代以降

⑵帝国支配の安定＝「帝国の平和」の局面

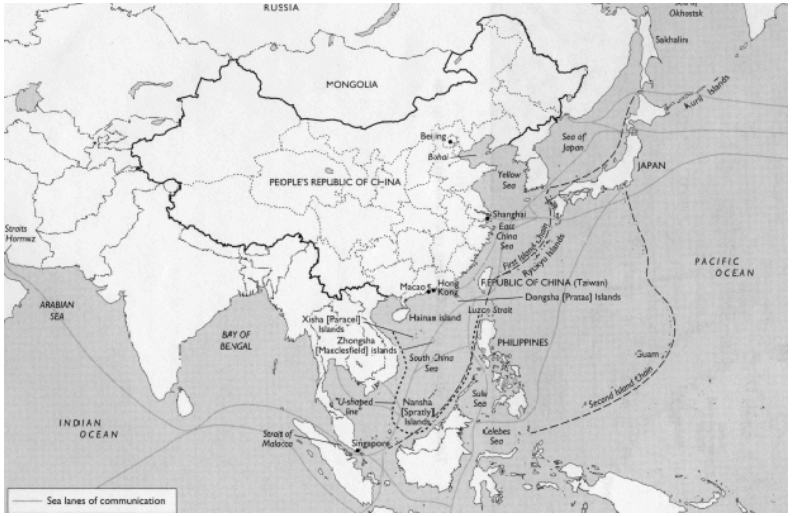
＊「大清の平和」、「大日本帝国の平和」、「アメリカの平和」

＊「帝国の鑿」が相対的に自律的に作動する時空を担保

⑶諸帝国盛衰の世界史ダイナミズム＝「台湾という来歴」の外部過程の局面

＊「Ｘ帝国の平和」の裏側の「Ｙ帝国の勃興」、覇権的パワーの交代→台湾歴史の重大な岐路を準備

台湾の地理的位置：①西太平洋交通路の中央、②中国大陸東南近傍海上



二−３．「帝国の鑿」：諸帝国の外挿国家と社会の相互作用の歴史社会学：代わり変わる帝国と周縁ダイナミズム【４つの観点】（１）、（２）

⑴変わる帝国の局面：世界帝国、国民帝国、非公式帝国、新中華帝国

＊それぞれの帝国の異なる世界史的位置・性格→異なる外挿国家の統治理性→異なるパワー投射の内容と方法

⑵代わる帝国の局面：「幕間」に付随する偶発性（contingency）と国家・社会関係のリセット過程

＊台湾における外挿国家形成の主要プロセス（清→日本の場合を念頭に）

①主権の移譲：条約、前帝国組織の撤退、統治資料の移譲

②社会制圧の遂行：組織的武装力による抵抗の排除

③可視化政策の遂行：国家が治安と財の流用のため人と人の組織および土地を判読可能なようにアレンジしようとする国家の意志と行動

④現地統治組織の形成：官治／自治の設定、協力者層の形成（社会指導層の取り込み）

二−３．「帝国の鑿」：諸帝国の外挿国家と社会の相互作用の歴史社会学：代わり変わる帝国と周縁ダイナミズム【４つの観点】（３）、（４）

⑶周縁ダイナミズムの局面：国家・社会関係の経常的展開とその帰結

＊清帝国：原漢複合性の形成

＊日本植民地帝国：「議会政治無き海外版明治維新」（周婉窈）

＊アメリカ非公式帝国＋「台湾大」の中華民国：「中華民国台湾化」（若林）→意想外の「台湾国家／国民」の形成

⑷台湾島の地政学意義の顕在化が国家・社会関係に影響する局面：帝国の盛衰に巻き込まれる台湾　　*@参照：レジュメ三－３－(3)*

＊清朝対台湾政策の大転換（1870-80年代）

＊皇民化政策・戦争動員（日本植民地統治期末期）

＊「中国要因」の作用と反作用の政治と米中関係の緊張（21世紀～）

三．第Ⅱ層：台湾歴史時空の行動者：原住民、外挿国家、漢人：外挿国家行動論理の検討を中心に

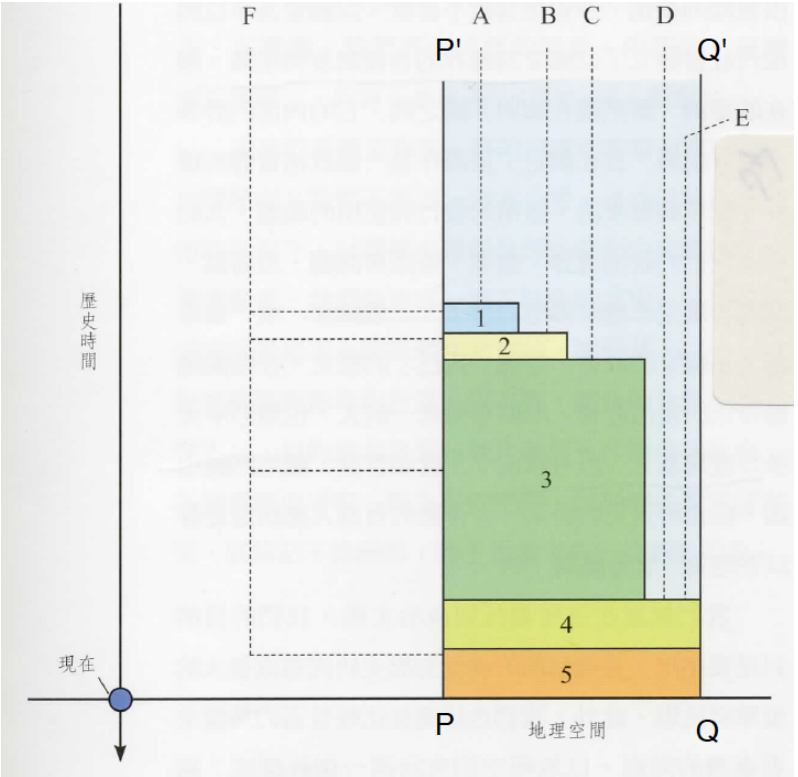
１．台湾歴史時空の行動者

⑴原住民族(A～E)、移住漢人(F)、外挿国家(1～５)

⑵来ては去って行った漢人以外の植民者:

＊オランダ人

＊日本人



三−２　「国家のように見る」（J. Scott）：可視化政策と秩序再編

☆水田を前にして：徴税官が見たい・知りたいものは？／農民（地主）があまり見せたくない・知られたくないものは？

☆可視化政策：調査/掌握（表１）、再調査（可視化政策の再起動）、経常掌握（人籍・地籍移動掌握、統計制度等）

→秩序再編（国家成員メンバーシップの整序、土地法制、財政秩序など国家の社会における制度基盤の形成）の起点

→派生的秩序再編（矢内原「資本主義化の基礎工事」、学校教育体系による臣民／国民形成など）

☆可視化政策をめぐる相互戦略性：「上に政策有れば、下に対策有り」

James Scott

Seeing like a State

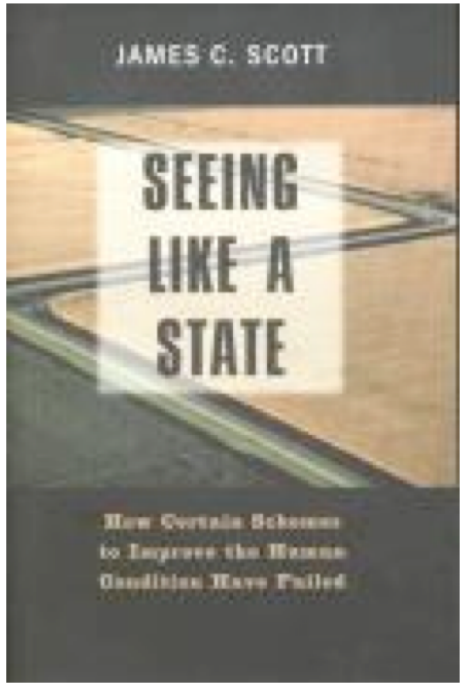


表１　可視化政策の内容：台湾史を念頭に（若林、2022）

	対象	掌握目標	ツール	成果物	掌握制度	流用／活用
人を対象とする可視化政策	人籍	個別の人の帰属・身分関係	訪問調査	台帳（登録簿冊）	住民登録制度、身分登録制度（「戸籍」）	徴税、徴用、徴兵、政治（選挙）
	人口	集合として見た人の動向	センサス	人口統計	センサス実施関連関連法規	各種政策立案
	社会	文化、慣習、産業	学術調査	調査報告書	調査実施関連法規	（旧慣立法）、司法（民事判決への慣習法の援用）
土地を対象とする可視化政策	地籍	人と土地の権利関係	対面調査、測量	台帳（登録簿冊）	土地登記制度など土地所有関連制度・法規	徴税
	地理	人文地理、自然地理	測量、採掘など	各種地図、海図	地図・海図管理制度	自然災害の防止、産業開発

出所）若林正丈作製

三−３．政治的＜力＞（国家権力）の社会作用と可視化政策

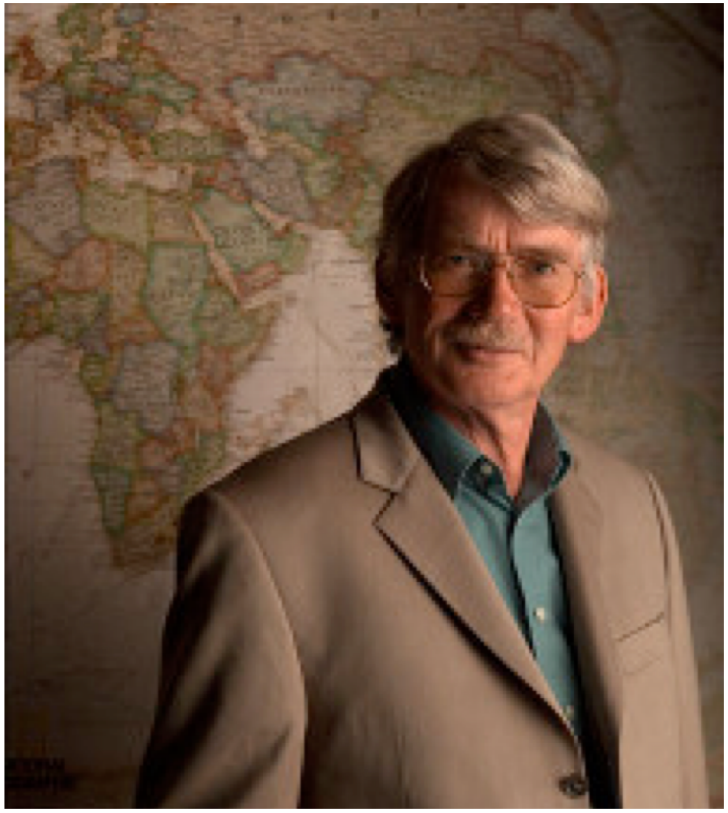
☆Michael Mann：social power（社会的＜力＞）のIEMPモデル：

＊社会は源泉の異なる４種の＜力＞(power)が構成する複合的なネットワーク群から構成されている。

＊＜力＞:自己の環境をコントロールし目標を達成する能力[powerは**權力**でもあり**能力**でもある]

＊ IEMPモデルのＰ=political power（政治的＜力＞）に注目

Michael Mann



三−３．政治的＜力＞（国家権力）の社会作用と可視化政策

☆IEMPモデル：

＊イデオロギー的<力>(ideological power)

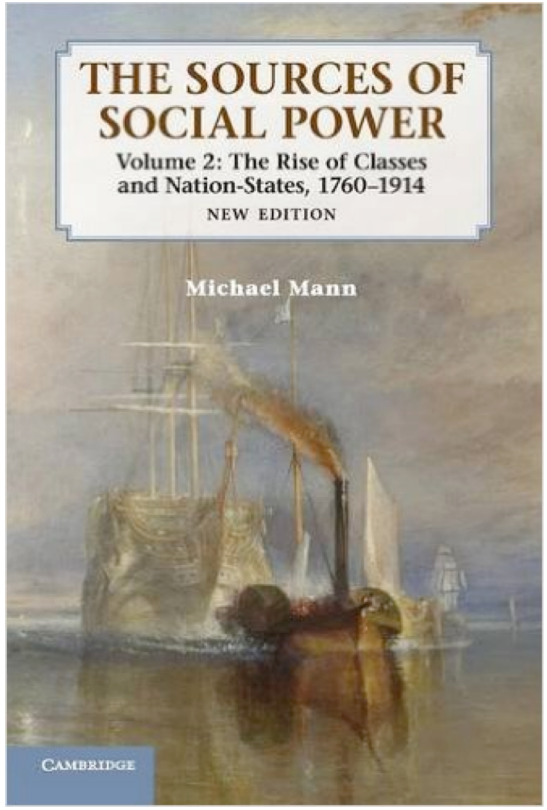
＊経済的<力>(economic power)

＊軍事的<力>(military power)

＊政治的<力>(political power)

@ political power が構成するところの領域を持った／領域に限定される組織体が国家（state）→政治的＜力＞＝国家の＜力＞（国家権力）

The Sources of Social Power: Vol.2



三−３．政治的＜力＞（国家権力）の社会作用と可視化政策

(1)基盤構造的＜力＞：「社会を通じて作動する＜力＞」(M.Mann)

＊政治的＜力＞(political power、国家権力)の２側面：

・決定に関わる側面：専制的＜力＞（despotic power: DP）：社会の*上から*作動する＜力＞

・執行に関わる側面：基盤構造的＜力＞（infrastructural power: IP：*基礎行政能力*）：社会を*通じ*て作動する＜力＞

表２　政治的＜力＞（国家権力）の二つの次元＜対応する台湾歴史上の国家＞

専制的<力>	基盤構造的<力>	
	弱い	強い
弱い	封建的<該当無し>	民主体制<民主化後の中華民国台湾>
強い	帝国的<清帝国>	一党支配<台湾総督府、国民党一党支配時期の中華民国台湾>

出所）Mann(2008:357), Table 1. <>内は若林が付加

三−３．政治的＜力＞（国家権力）の社会作用と可視化政策

⑵ IP=「双方向に作動する＜力＞」と可視化政策：一つの歴史社会学的想定

☆可視化政策を遂行する＜力＞(秩序再編を遂行する＜力＞)：基盤構造的＜力＞

☆基盤構造的＜力＞（power through society）による社会諸要素の国家制度への取り込み（caging）作用→「社会統合作用」とともに「社会紛争誘発作用」も起こる→浸透する制度に対する発言欲求の発生＝参政権／代表制問題の発生（佐藤成基）

⑶政治的＜力＞作動の重層性：政治的＜力＞の領域性とその地政学・外交的側面

☆「諸帝国の周縁」の政治空間の台湾歴史時空にとっての重層性：

台湾内空間、帝国内空間、帝国際空間

三－４　代わり変わる帝国と社会の行動者
(1)清帝国州県制政府の官治、郷治、番界統治に対して

☆垂直的視点：

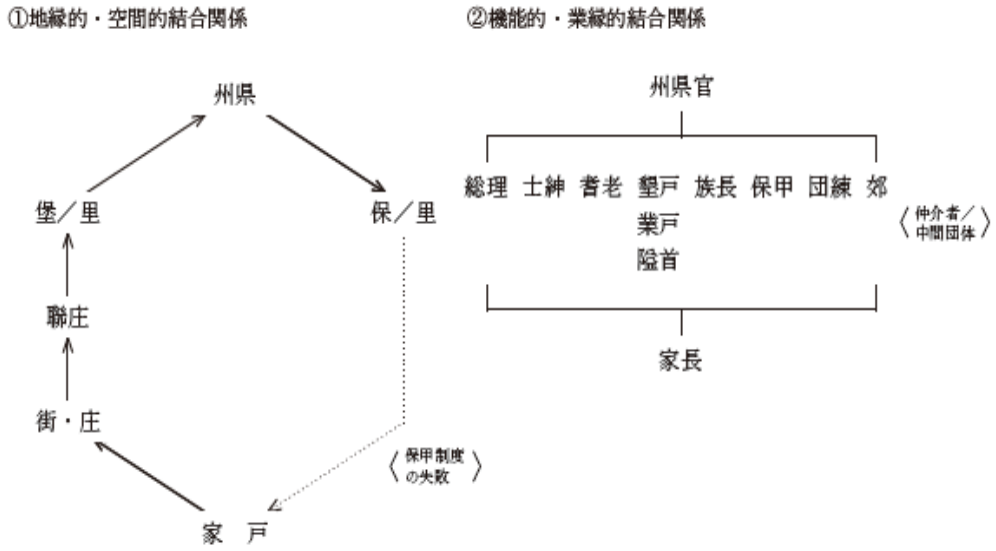
＊官治：州県制（科挙合格の正官と多数の処理および緑営）：徴税、訴訟対応、治安維持

＊郷治：漢人「仲介者・中間団体（豪族、士紳、耆老、行郊など）」（右図）：官治の余白に同型の統治

☆水平的視点：

＊「画界封山（禁）」の統治：「番界」の設定、「界外」に官治機構不設置、漢人の越境禁止、熟番保護とその武力の治安利用など）：「下層能動性」（柯志明）：奸民、通事、熟番、番割

「伝統台湾漢人社会の統治構造」（新田、2020）：右＝官治の構造、左＝郷治の構造



三－４　代わり変わる帝国と社会の行動者
(2)台湾総督府の統治に対して

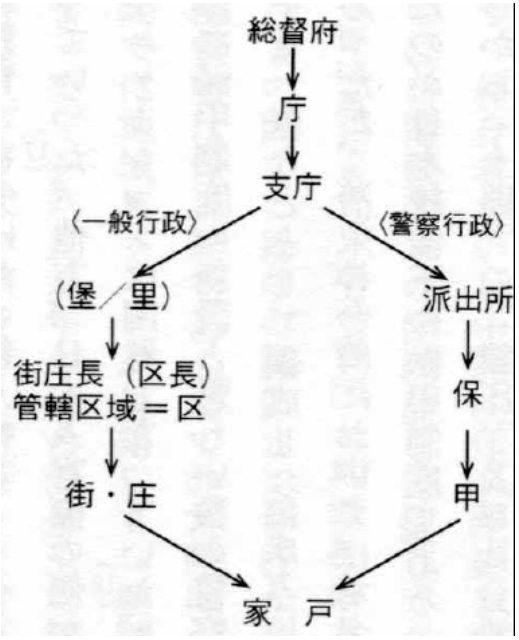
☆垂直的：台湾総督府行政機構の基層レ別までの拡大（行政→街・庄；警察→保・甲）

＊清代漢人「仲介者・中間団体」の改造：清国家権力の垂直的余白に容認された政治権力と武装力の否定→新たな統治構造の中に従属的配属（←土地調査事業による土地権利の保障）→「土着地主資産階級」（若林）≒「社会領導階層」（呉文星）

＊植民地学校教育の漸次的拡大→漢人「新興知識人」の台頭→協力者層の更新／参政権要求、政治社会運動の展開

☆水平的：「ゾーミア」[無国家地帯]の消滅、「理蕃」統治下の政策的なエリート養成（呉叡人）

「台湾総督府の初期地方統治構造（1904-20）」（新田、2020）



呉文星『日治時期台湾社会領導階層』

四　第Ⅲ層【例示】：諸帝国の「網」と「鑿」とが縒り出す国家・社会関係のコンテキスト

四－１　代わり変わる帝国と原漢複合性の展開

四－４　代わり変わる帝国と「議会政治の夢」：誕生、挫折、成就

＜省略＞

四－２　代わり変わる帝国と可視化政策

四－３　代わり変わる帝国と土地所有制

四－５．代わり変わる帝国と台湾の社会、国家、国民（nation）：積み重なる周縁ダイナミズム

四　第Ⅲ層【例示】：諸帝国の「網」と「鑿」とが繰り出す国家・社会関係のコンテキスト

１．代わり変わる帝国と原漢複合性の展開

⑴台湾への漢人移民と原漢複合性の形成

☆台湾島への国家外挿と漢人移住開墾の開始→清帝国統治下：番と民の区別／生番と熟番の区別→漢人開墾の進展と辺境の混乱→「番界」の設定（「画界封山[禁]」）：漢人人口増を背景に漢人・熟番・生番の関係に介入する国家の「族群政治」の開始

☆清帝国下の二重の原漢複合性：

①行政的複合性：「番界」の設定・再設置（非「版図」原住民族地域の地理的定義と再定義）；「界内」での「熟番地権」の設定；「理番同知」の設置（「三層制族群空間体制」[柯志明]）など

②政治的（領域的）な原漢複合性：生番地域（非「版図」＝無国家地域）の持続（域内非「版図」の放置）とその縮小：漢人の「越界開墾」とそれを後追いする「版図」（官治地域）の山地の側への拡大（「番界」の東移）

18世紀「番界」の東移

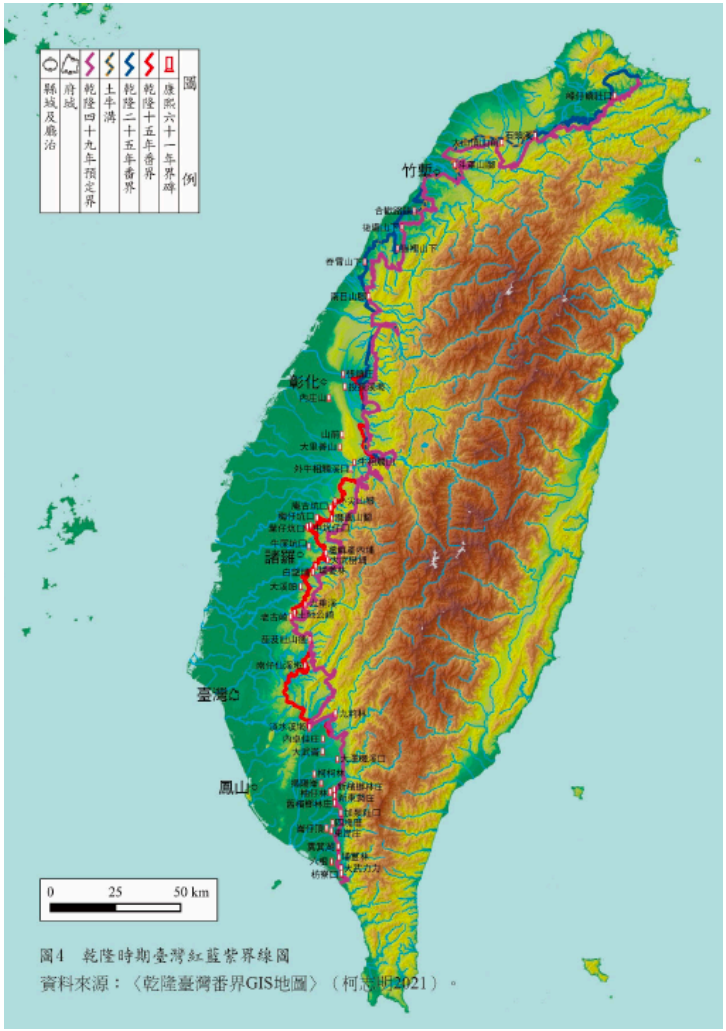
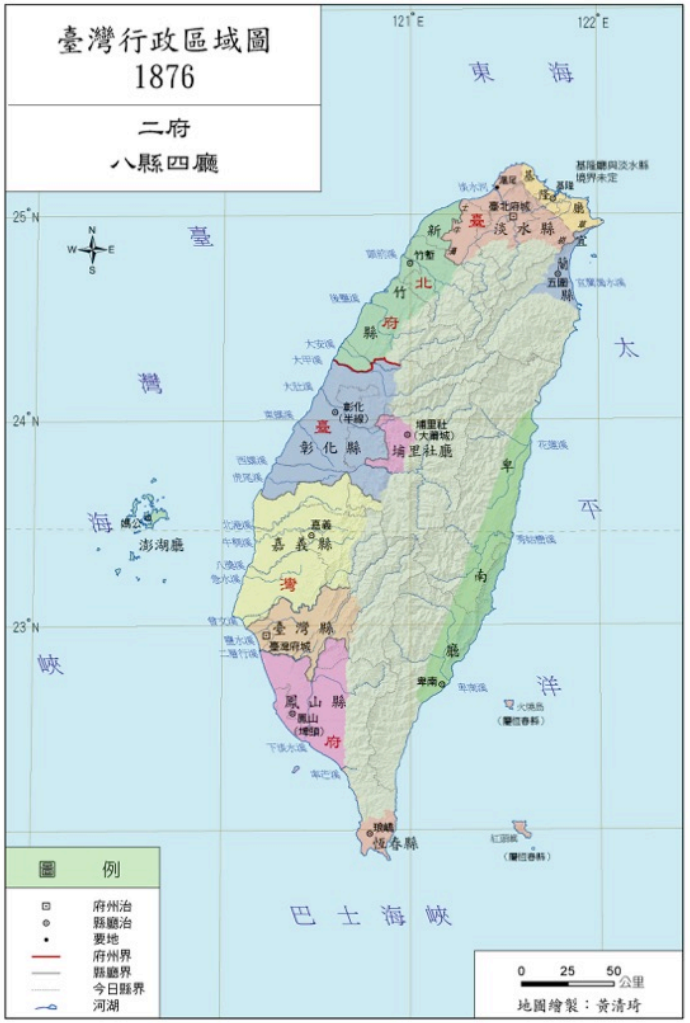


圖4　乾隆時期臺灣紅藍紫界線圖
資料來源：〈乾隆臺灣番界GIS地圖〉（柯志明2021）。

牡丹社事件後に台湾の行政区画：増設＝恒春縣、卑南廳、埔里社廳（図中1876年は1875年の誤り）



四－１. 代わり変わる帝国と原漢複合性の展開

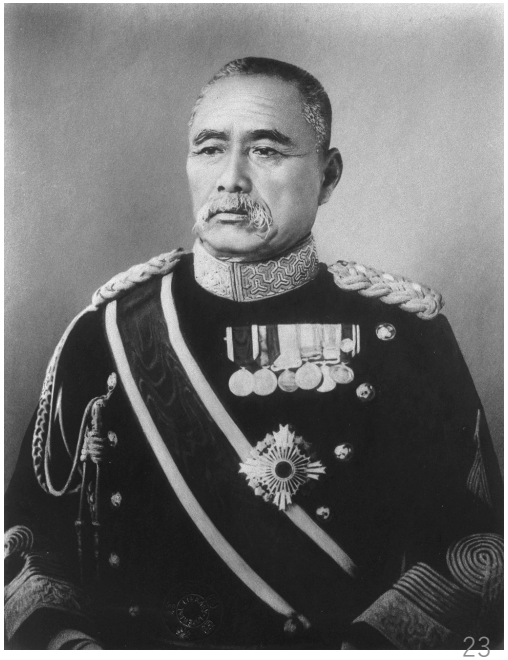
（２）無国家地域の消滅と国家の侵入：「西欧の衝撃」下の「開山撫番」のバトンリレーと原漢複合性の転換

☆「画界封山」から「開山撫番」へ：ローヴァー号事件（1867）、牡丹社事件（1874）の衝撃→1875年以降、清朝による非「版図」消滅軍事キャンペーンの挫折→日本による達成（「隘勇線の前進」→「五箇年理蕃事業」）

☆「開山撫番」を引継いだ台湾総督府：警察主体の「理蕃」体制の構築（山地＝特別行政地域）→政治的複合性（清帝国治下）→同一の政治的屋根の下の行政的複合性（政治的には統合と行政的には隔離）への転化

＊清帝国治下熟番に対する行政的複合性消滅：熟番地権の消滅（←土地調査事業による大租権の消滅）；熟番身分の事実上の解消（戸口調査簿に「熟」の字記入のみ）

「理蕃総督」佐久間左馬太（台湾総督在職：1906－1915）



四－１. 代わり変わる帝国と原漢複合性の展開

（３）中華民国統治下の内部植民地主義

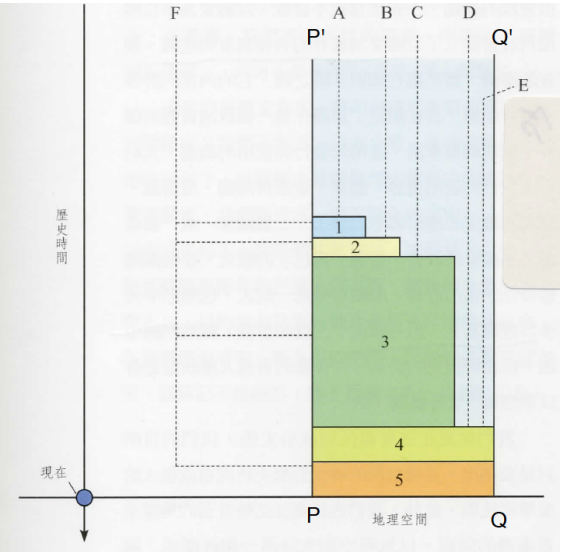
☆戦後原住民族地域の国家化、資本主義化、キリスト教化（黄應貴,2012）

＊国家行政の浸透（山地郷の設置）、山地「平地化」政策、山地保留地（かつての「蕃人所要地」）の土地調査・所有権付与

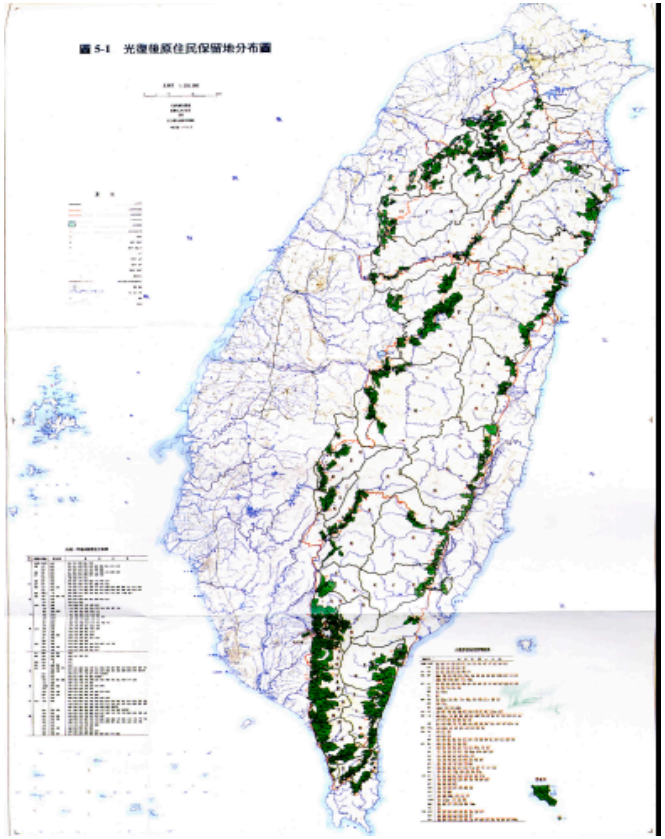
＊貨幣経済の急送な浸透：平地資本の進出、部落の若者の平地流出、「都市原住民」の形成

＊キリスト教の広がり、

周婉窈図は「ゾーミア」縮小・消滅過程も示す



戦後の山地保留地（戦前の「蕃人所要地」



四－１. 代わり変わる帝国と原漢複合性の展開

（４）「台湾原住民族」の形成と原漢複合性の現在

☆国家と平地資本主義化の浸透→内部植民地主義的社会統合

☆1980年代以降：民主化＋台湾原住民族運動の台頭→多文化（多族群）社会としての台湾社会のイメージが正統化される→原漢複合性の新たな段階：

＊台湾原住民族運動と「台湾原住民族」アイデンティティの形成

＊民主化後の中華民国憲法体制下での原住民族行政（行政院原住民族委員会成立）と原住民族法制（ex. 原住民族基本法、2005年）

＊現行近代法体系と原住民族の慣習法体系・主体意識との相剋（呉豪人）

呉豪人『野蠻的復權』（2019）

四－４．代わり変わる帝国と「議会政治の夢」：誕生、挫折、成就

(1)植民地国家と「議会政治の夢」：その誕生と挫折 i

☆「漸進的内地延長主義」の斉嗇な政治的権利付与→「議会政治無き海外版明治維新」（周婉窈）＝立憲主義統治体制の中に官僚制はあるが代表制は無い植民地国家の支配

←しかし、参政権要求＝「議会政治の夢」は生まれた

☆「民主・自治の台湾」というビジョンの誕生：「台湾規模」と地方行政レベルの双方に参政権要求運動

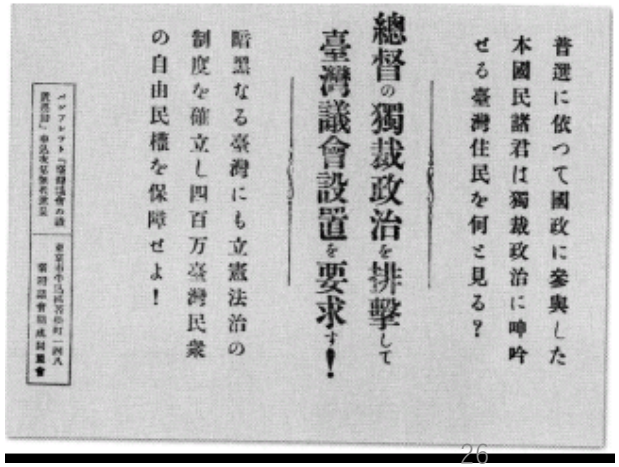
＊台湾議会設置請願運動（1921－34年）→拒否

＊台湾地方自治聯盟の運動（1930～37年）→1935年と39年に「半自治」の州・市会及び街・庄協議会選挙実施（ともに半数官選、制限選挙）

＊ 1945年衆議院選挙法延長施行→幻の国政参政権（男子、制限選挙）

☆「理蕃」統治：蕃童教育所、個別エリートの育成と取り込み

「台湾議会之父」林献堂（1881-1956）；日本本国民に台湾議会設置を訴えるビラ


普選に依つて國政に參與した
本國民諸君は獨裁政治に呻吟
せる臺灣住民を何と見る？

總督の獨裁政治を排撃して
臺灣議會設置を要求す！

暗黒なる臺灣にも立憲法治の
制度を確立し四百万臺灣民衆
の自由民權を保障せよ！

四－４．代わり変わる帝国と「議会政治の夢」：誕生、挫折、成就

(1)植民地国家と「議会政治の夢」：その誕生と挫折 ii

☆可視化政策・秩序再編→国家の社会基盤制度の浸透（IP=基盤構造的＜力＞の作動：社会諸要素の国家の制度への囲い込み＝「協力者層」の形成）

→「協力者」と浸透した国家制度との相互作用の拡大

→「協力者層」の中に「意見ある人々」の登場

→「意見を組織する人々」の形成（IPの「社会分裂誘発作用」）→参政権要求の出現

☆立憲政治体制の下での近代的掌握・流用の制度には近代議会政治の論理（課税協議権：「代表無くして課税無し」）が潜在、総督府官僚もこれを承知

@参政権付与と連結されなかった台湾土地調査事業

cf. 沖縄県土地整理事業（本国立憲体制に組みこもうという政治目的[宮崎博史、1994]）

楊肇嘉（1892-1967：於1928年東京、右の人物）＜左は蔡培火＞:「協力者」から「意見を組織する人」になった

四－４．代わり変わる帝国と「議会政治の夢」：誕生、挫折、成就

⑵東西冷戦下の国民党一党支配と「議会政治の夢」：挫折と成就

☆直截・無遠慮な同化主義：「国語」普及政策、地方自治制度、男女普通選挙権付与（原住民にも：「山地郷」の設置）

☆非常体制下（「反乱鎮定動員時期」、長期戒厳令）の歪んだ「台湾議会」（省議会、「万年国会」[1970年代初まで大陸選出議員が非改選で職務]）

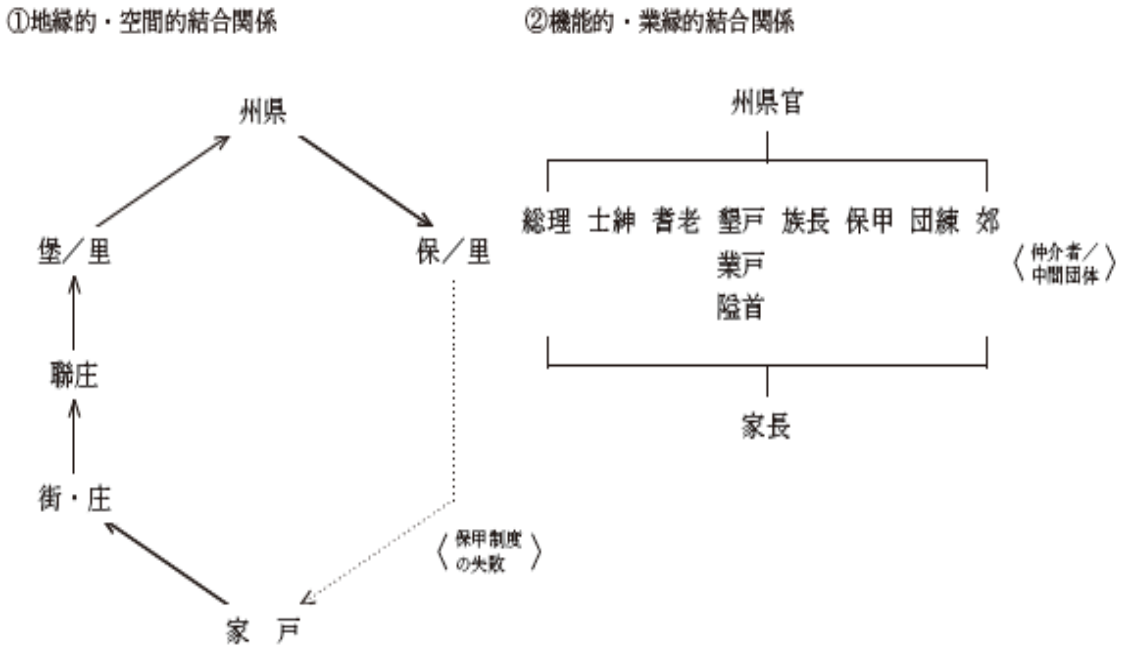
＠「議会政治の夢」に対する「時差」の壁：日本植民地政権は「民度」を理由に、吝嗇な参政権付与を以て応え、戦後国民党政権は、「非常時」を理由に、政治的自由の圧殺を以て、応えた。

☆「議会政治の夢」の実現：選挙（地方選挙、国会増加定員選挙）を重要径路とした「分割払いの民主化」と「憲政改革」

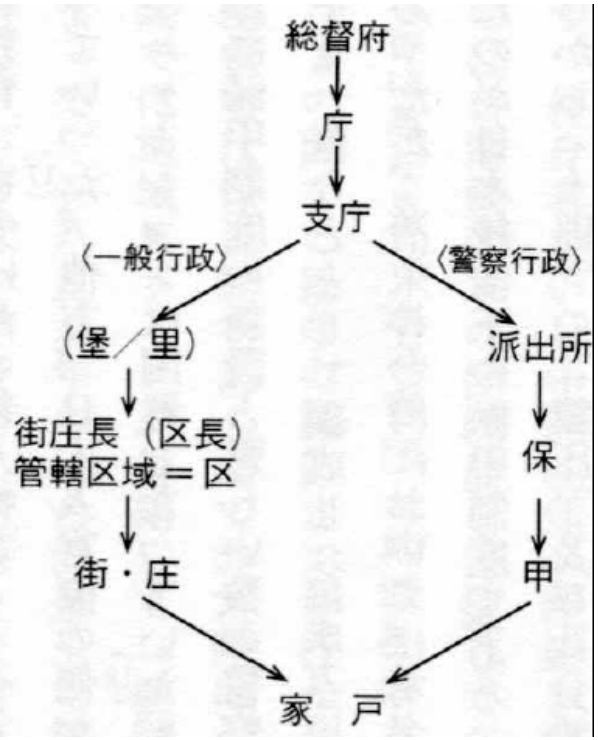
台湾省議会党外議員「五虎一鳳」（「党外」＝国民党の外）

参政権問題の議論をなぜ植民地期から始めるのか？→仮説：清帝国の政治＜力＞の制度は代表制形成の方向に向かわず（制度化されたエリート政治の方向に向かい）、一方、州県制官僚により基層社会で一定の政治権力を行使し武装力を保持することを容認されていた清代漢人社会の「仲介者／中間団体」は、その武装力を日本軍警により奪われ、台湾総督府行政組織によりその政治権力を無効とされたため、かれらは、新たに基層まで浸透した統治組織の従属的要員と変身させられた。ために、その政治参加要求は、学校教育を通じた学歴エリートへの上昇と本国の立憲体制の論理に沿った代表制の形成に期待するしかなかった。

「伝統台湾漢人社会の統治構造」（新田、2020）：右＝官治の構造、左＝郷治の構造



「台湾総督府の初期地方統治構造（1904-20）」（新田、2020）



結論に代えて：

「台湾という来歴」における周縁ダイナミズムの堆積と台湾の「社会」、「国家」、「国民」

☆主要骨格ができた時期別の**超**概括：　＜レジュメ四－５－(2)＞

①社会：清帝国下で「社会」ができた（完了＋持続）：漢人開墾移住社会の拡大と原漢複合性の形成

②国家：日本植民地帝国下で「国家」ができた：近代国家の社会基盤の植民地的形成

③国民（nation）：アメリカ非公式帝国庇護下の中華民国統治下で「国民」ができた：意図せざる「台湾サイズ」の国家と国民の形成

四. 結びに代えて

☆「序説」とは何か？何故今「序説」か？

＊序論は最後に書き上げるもの

＊学術活動の終盤に「序説」を書く

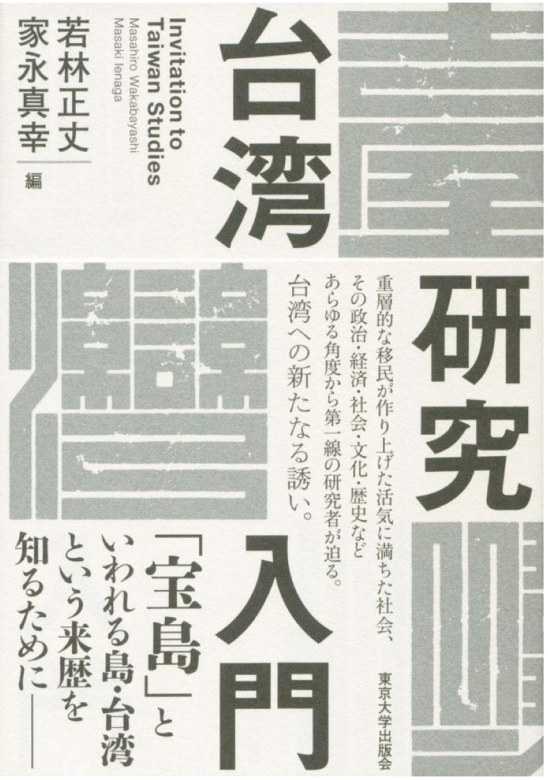
☆ 罪滅ぼし

＊”So what?”の連発は自分にかえってくる

☆罪作り

＊戦後日本台湾研究ver.2 への最終挿話？

＊戦後日本台湾研究ver.3 への罪作り？



ご静聴ありがとうございます。
これまでの御指教、御鞭撻ありがとうございます。
鳴謝聆聽，也衷心感謝一路承蒙指教與鼓勵